

広島を拠点に国内外で活動する友枝望は、「相対性や類似性を手掛かりに、様々な場所や素材に行為を加えて、観察や検証の対象とする作品制作を行う」として、掌中の物質・眼前の空間から、暮らしや歴史、都市や社会のあり様などへと、鑑賞者の想像や思考をシームレスに引き寄せさせる作品を展開させます。特に「あるまじりの構造から全体性や意味性を消失させることで、個々の固有性を顕在化させる」ために、「反復」と「ノーリング(knolling プリコラーージュ・アーティストである彫刻家のトム・サクスの手法に代表される分類・配置のメソッド)を表現手法として用いた作品は、彫刻とインスタレーションの曖昧な領域をつくりだします。

自粛要請が緩和された7月末に酒蔵を初めて訪れた友枝は、以後、おもに資料ベースにより酒蔵や八木地域をリサーチするとともに、10月末より八木に滞在して制作に取り組んできました。

酒蔵の玄関から奥へと進む途中、おくどさんの煙突に貼り重ねられた「火酒要慎(ひのようじん)」のお札。愛宕山頂に愛宕神社の総本宮が鎮座する京都において、このお札はよく見かけます。八木酒蔵のある地域では例年4月に皆でお参りし、持ち帰ったお札を煙突に貼ってきた。初めて酒蔵を訪れた際、この「愛宕さん」のお札に注目した友枝は、11月9日に地域の方と一緒に愛宕山に登り、持ち帰った一枚によってこの「歴史」に加わった。

幾つかの資料をあたる中で、かつて八木地域では「松茸狩り」や「鮎狩り」がレジャーとして盛んであり、多くの観光客が訪れていたことや、古くから産業としてあった養蚕から転じて桑酒づくりが盛んとなり、それが「大変に好評を得ていた」という記録を目にした友枝は、この遠い記憶・記録を引き寄せるため、これらをシミュレートしようとしている。しかし、桑は寒さで枯れ、蚕は繭をつくらず、地域の方の記憶を頼りに探した松茸山は見当たらず、鮎の季節はとくに終わり、代わりに求めたハヤ(中型で細長い体型をもつ淡水魚の総称)は、夜中に入り込んだ近所の猫に狩られた。そうして、想像だけでなぞろうとした行為はなにひとつ往時を再現はしていない。しかし、友枝は地域の歴史を体験した。

酒づくりを主導する杜氏集団。なかでも丹波杜氏は日本三大杜氏のひとつとされています。その杜氏が独特の抑揚や小気味良い手拍子とともに歌う「酒づくり唄」は、酒づくりに携わる者達の呼吸や気持ちを合わせるためのものであり、家族や恋人を唄った・詠ったものが多くあります。友枝が暮らす広島・西条市は、同じく酒造りが盛んな土地で、ここでは昭和50年代後半から小学生高学年を対象に、酒づくりの一年の暮らしを織り込んだオペラ『白壁の街』を上演してきたとのこと。30年以上前、このオペラ(音楽)の練習で、「酒づくり唄」に親しんだ友枝は、11月4日にタップダンサーを招き、この歌を聴きながらタップ(拍子)を踏んでもらう映像・インスタレーションを制作し、木造の空間に「酒づくり唄」を響かせた。

友枝はおよそ2週間前より、倉庫に眠っていた大量の品々をひとつひとつ観察し、2階のコンクリートの空間に分類・配置した。おそらく酒造りに用いたであろう品々、ここに暮らす家族のものであろう品々に大別しながら、奥に向かって高く並べられたものはまるで「山」のようであり、都市のようでもあり、それぞれの記憶や用途の曖昧な様相は、雑木林や樹海、あるいは遠くから眺める街並みを連想させる。

本展において友枝は、酒蔵の歴史や記憶、地域の史実をモチーフとしながら、そこに「重ねる」「まねる」「なぞる」「並べなおす」といった手つきでアプローチしている。それを眺める私たちには、それが上手いのか下手なのか、正しいのか間違っているのかは判然とはしない。しかし、友枝は歴史や記憶を体験によって自らのものとし、そこに加わり、現れている。そして、それはどこか鼻唄に似ている。

正木裕介(ギャラリー・パルク)

〔statement〕

愛宕のお札から始まり、蔵を抜けて大堰川へ抜ける

旧八木酒造の蔵はアナゴの寝床のように、奥へ進めば進むほどに長い歴史の面影が今昔・昔今と溶け合います。酒造りの仕事道具と個人的な所有物、歴史を感じる意匠や、モダンなデザイン……。これらはここを通り抜けるよそ者の時系列の感覚が狂わせません。よそ者の私は、地域慣習を知り、暮らしを想像し、自らの体験によってこの場に溶け込もうとします。しかし、蚕に与える桑の葉はただちに枯れ、釣り名人とお菓子の物々交換でゲットしたハヤは野良猫に食べられ、松茸を採る夢を見ながら山登りの筋肉痛で苦しむ。こうしてズレにズレ、ヌルヌルとした終わりのない制作を進める日々は今日も続きますが、明日にはもうできなくなるかもしれない。そんな中で、こうした時間や感覚を作品みたくな行為に託して、鑑賞者よそ者たちと共有してみたいのです。

〔CV〕

友枝望

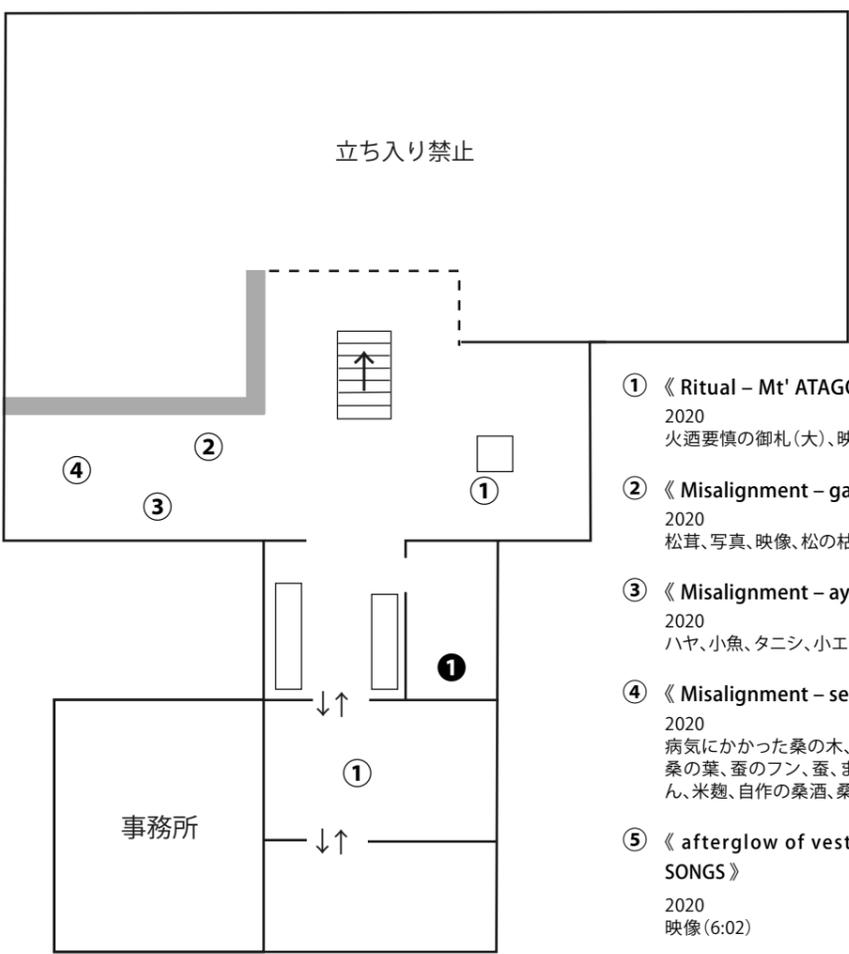
Tomoeida Nozomi

- 1977 大阪生まれ
- 2001 広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科卒業
- 2002 ハノファー専科大学美術科に6ヶ月間交換留学
- 2003 広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了
- 2006 広島市立大学大学院芸術学研究科博士後期課程単位取得退学
- 2009 広島市立大学芸術学部アートポラトリー/Alternative Space CORE / 広島
- 2010 ハンブルグ美術大学彫刻科、及び時間ベースメディア科在籍
- 2013 「カナリアがさえずりを止めるとき」(広島市立大学芸術学部ARTポラトリー/Alternative Space CORE / 広島)
- 2013 個展「CLUSTER」(大阪府正江之子島創造文化芸術センター / 大阪)
- 2014 「中房総国際芸術祭いちばアートミックス2014」(AAES、旧里見小学校 / 千葉)
- 2014 「アート・イ・チハ」(ART GAL-LERY miyauchi / 広島)
- 2015 個展「アート・イ・チハ」(ART GAL-LERY miyauchi / 広島)
- 2014 「中房総国際芸術祭いちばアートミックス2014」(AAES、旧里見小学校 / 千葉)
- 2015 個展「アート・イ・チハ」(ART GAL-LERY miyauchi / 広島)
- 2015 常設展「2016-広島にゆかりのある作家の作品展」(フロンティア / 広島)
- 2016 「We are the islands」(インスティテュート・オブ・アート・プロジェクト / 広島)
- 2016 「We are the islands」(インスティテュート・オブ・アート・プロジェクト / 広島)
- 2016 「almost the same, but not quiet/48Stunde Neuköln」(インケルン地区 / 上海)
- 2016 「STRANGE LOOP」(GALERIE GENSCHER / 上海)
- 2016 プロジェクト「広島アートプロジェクト2006」(広島市吉島地区 / 広島)
- 2016 プロジェクト「広島アートプロジェクト2008」(旧日本銀行広島支店ほか) / 広島
- 2016 プロジェクト「Camp Berlin」(VVG Halle / 上海)
- 2017 プロジェクト「広島アートプロジェクト」(超高品質なホコリ展) / 広島市旧中工場ほか / 広島)

- 2018 「美術館の十層」(広島市現代美術館)
- 2018 個展「Comparisons」(Gallery PARC / 京都)
- 2018 「BLACKLISTED」(Seoul Art Space GEUMCHEON / ソウル、韓国)
- 2018 「Wadden Tide 2016 - Contemporary art project」(Bilvand-shuk / デンマーク)
- 2018 常設展「2016-広島にゆかりのある作家の作品展」(フロンティア / 広島)
- 2018 「We are the islands」(インスティテュート・オブ・アート・プロジェクト / 広島)
- 2018 「almost the same, but not quiet/48Stunde Neuköln」(インケルン地区 / 上海)
- 2018 「STRANGE LOOP」(GALERIE GENSCHER / 上海)
- 2018 プロジェクト「広島アートプロジェクト2006」(広島市吉島地区 / 広島)
- 2018 プロジェクト「広島アートプロジェクト2008」(旧日本銀行広島支店ほか) / 広島
- 2018 プロジェクト「Camp Berlin」(VVG Halle / 上海)
- 2018 プロジェクト「広島アートプロジェクト」(超高品質なホコリ展) / 広島市旧中工場ほか / 広島)

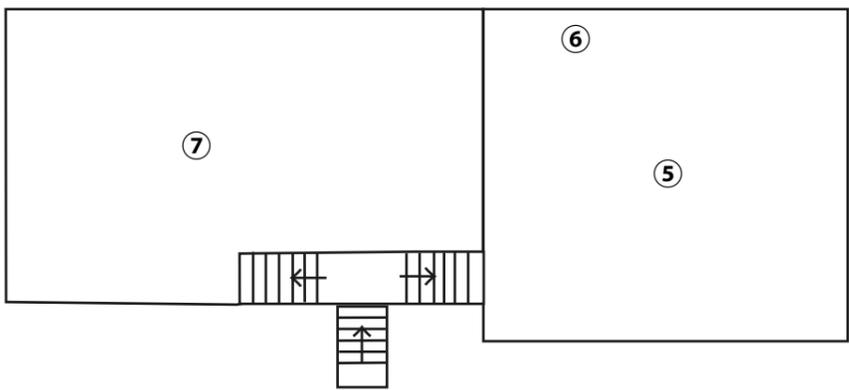
〔MAP〕

〔1階〕



- ① 《Ritual – Mt' ATAGO》
2020
火酒要慎の御札(大)、映像(24:47)
- ② 《Misalignment – gather matsu-take mushrooms》
2020
松茸、写真、映像、松の枯葉、シダ
- ③ 《Misalignment – ayu fishing》
2020
ハヤ、小魚、タニシ、小エビ、水藻、石、大堰川の水、井戸水
- ④ 《Misalignment – sericulture, mulberryleaf-sake》
2020
病気にかった桑の木、枯れぎみの桑の木、蚕が食べ残した桑の葉、蚕のフン、蚕、まゆ玉、ホワイトリカー、桑の葉、みりん、米麴、自作の桑酒、桑酒ラベル(八木酒造)
- ⑤ 《afterglow of vestige – TAMBA SAKE BREWING SONGS》
2020
映像(6:02)
- ⑥ 《afterglow of vestige – TAMBA YAGI》
2020
OHPシートにインクジェットプリント
- ⑦ 《Alignment – YAGI Shuzo》
2020
八木酒造に残る品々
- ⑧ 『すべ と しるべ 2020 #02 [残影の残光] / Ver.1』
2020 2:59
Director | 正木 裕介 (Gallery PARC)
Filme | 麥生田 兵吾
Performer | 今村 達紀

〔2階〕



残影の残光

afterglow of vestige

友枝望

Tomoeda Nozomi

会期 11月14日[土]・15日[日]・16日[月] 12時から17時

会場 大江山

オーエヤマ・アートサイト
O-eyama Art Site

主催・企画 ギャラリー・パルク

協力 オーエヤマ・アートサイト(会場提供)

今村達紀

大堰川のハヤ釣り名人、黒田大地、米沢直、JUNのみなさま、秋田家のみなさま

*京都市文化力チャレンジ補助事業

『すべとしるべ』は、2020年6月末にスペースを閉鎖したGallery PARCが、その活動内容を変更して取り組む最初の展示企画であり、現在の社会状況の中にあつて、展覧会における『つくる・ひらく・のこす』の関係性を検証し、これからのに向けた新たな可能性を試行するためのプロジェクトです。

築400年を超える「旧八木酒造」の酒蔵に、むらたちひろ、友枝望の2名のアーティストが滞在・制作し、そこに立ち上がった表現をそれぞれ3日間のみ展示公開するものです。また、公開終了後には、それぞれの展示を記述した映像記録をオンラインにより公開します。

10/24・25・26に展示公開する「時の容 while it goes」では、水を必須とする染織を「時をうつし見るためのすべ」と捉えるむらたちひろが、永く水と関わってきた酒蔵に滞在するなかで、場の空気、水や音に触れながら制作した作品により、時とともに現れるもの・揺らぐものを見つめる機会を目指します。

11/14・15・16に公開する「残影の残光 afterglow of vestige」では、インスタレーションを多く手掛ける友枝望が、旧八木酒造と土地の歴史、営為や暮らしに内在する重層的な記憶を抛り所に、現在と過去を多重露光のように重ね留める試みにより、これからの未来に向かうための新たな「すべ」を手探りします。

それぞれがこの場・この地で何を感じ、見出し、示すのかはまだ不確かではありますが、現在から続く未知の「これから」において、自身の表現にまず目を向け、その眼差しを再びこの先へと投げかけることで、手探りながらも前に進むためのしるべ(起点)となるのではないのでしょうか。

空間の中、作品の前に立ち、この場の空気を深く吸いこみ、その臭いを感じながら、蔵に流れた営みの時間、ここに滞在した作家の眼差しや手つきを追う。この「体験」はいつしか鑑賞者が自身の視点を獲得することを促し、その眼差しはまた、過去・現在だけではなく、ここからの未来へと投げかけられるのではないのでしょうか。

これらに向かう(すべ)を編み直す。

ここから未知への道程に(しるべ)を残す。

これまでもこれからも、この繰り返し。

本プロジェクトはまた、展覧会にまつわる『つくる・ひらく・のこす』という一連を、現在の状況において検証・最適化するとともに、これからの備えた方法(すべ)を開発することを目的とした試行錯誤でもあります。

作家による表現(すべ)を社会に向けてひらく場(しるべ)でもある「展覧会」は、鑑賞者が会場を訪れ、作品の前に立つことではじまる「体験」をともなう場であるといえます。しかし、それは空間・時間を限定することで可能なものであるといえ、それゆえに「展覧会」という出力方法は、現在からしばらくの社会状況に応じた創意工夫が必要であると考えます。

そこで、本プロジェクトでは『つくる・ひらく』のみならず『のこす』こと、とりわけ映像による展覧会の記録について、その在り方や方法を模索します。

これまで多くの展覧会における記録(写真・映像・情報)は、まず事実を残すことを目的に、実際の鑑賞体験を補完する機能を担っていたといえます。しかし、そうした体験が困難となった現在において、この記録が果たす役割・機能にも変化が必要ではないかと考えます。この視点から、本プロジェクトでは、『のこす』記録が「読まれる」時に焦点をあわせ、そこに鑑賞体験と重なる・異なる、新たな何かを『つくる』ことに目を向けたいと考えます。『すべとしるべ』は、「読み物」としての記録、いわば「記録と記述」の狭間へとより意識的に踏み込むことで、そこにどのような体験を「ひらく」ことが出来るのかについて眼差しを向け、表現がこれからの社会に対応しながら、そこで起動するための術を編み出す機会にしたいと考えます。

制作した映像は展示公開終了後にオンラインにより公開します。

こちらも引き続きご注目ください。

subeshirube

sube_shirube